

# ○昭和三十六年度学部卒業論文要旨

## 韋 庾 物 研 究

栗 原 孝 子

中唐の詩人韋庾物を研究の対象とし、その人と作品（自選の韋蘇州集十巻が残されている。——四部叢刊本によると五五三首）を理解することとめた。

作品の研究に中心をおいたわけであるが、作品を研究するには、その人物の伝記を知ることが必要である。どのような生活環境の中から生まれた作品であるかを知るとは、理解を助けることになるからである。そう思つて伝記の考察にとりかゝつてみたものの、韋庾物に関する限り、資料はきわめて乏しく、刺史を歴任したほどの人物でありながら、正史にも載せられておらず、唐才子伝、唐詩紀事、韋刺史伝、韋蘇州集序にその片鱗がうかがわれるにすぎない。中では、韋刺史伝が最も詳しいが、錢大昕も指摘しているように、明らかに誤りと思われる記事を含んでおり、全面的に信用することはできない。そこで、伝記に関しても韋蘇州集が大きな役割をはたすことになるわけであるが、年代を知ることのできる詩はわずかである。そのため、諸書の矛盾を調整する作業にとどめた。しかし、大きな疑問の一つであつた生卒年代については納得したつもりである。

伝記と共に、韋庾物の姿を知る手がかりになるのは、交友関係である。伝記上に現われる人物と、詩集より見出される人物とに分けて考察してみた。伝記上に出て来る人物は、皎然、秦系、劉長卿など、四、五人にすぎない。が、寄贈、酬答の部を中心に、詩集中より統計をとってみると、驚くほど多くの人名が浮かび上る。しかしそれとても、姓だけの人や伝記を知りようのない人ばかりで、そこから韋庾物を理解することは困難であつた。大曆の十才子と呼ばれる人々のうち、李益、吉中孚の名が見え、孟郊との交際もあつたことが考えられる。これらの人々との関係を追求して、中唐詩壇における韋庾物の位置を知る手がかりにすべきであつたと思う。

次は、詩の考察である。詩の考察の方法にはいろいろあるが、私は、頻度数も多く、韋蘇州詩の特色と考えられる「清」「明」「幽」「淡」「独」「孤」に着目し、それが、どのような形で詩中に表われ、詩をどのように特色づけているか考えてみることにした。

最も強く詩風を特徴づけている語は「清」であり、それに次ぐのが「幽」であろう。「清」は、清泉、清露、清風等と用いたもの、清と単独に用いたもの、合計すると一三六回出て来るが、いずれも詩に、澄みきつた清らかな雰囲気や漂よわせている。露や風、泉や川に「清」を感じるのとは当然のこととしても、鴈や山、塵にまで、清らかさを感じる韋庾物の「清」に対する感覚は、異常なまでに鋭い。冷やかなまでに澄んだ境地から出る清冽な詩は、韋蘇州集の大きな特色の一つである。

## 『野草』試論

大茂利充

「清」と並んで、数多く用いられ、韋応物の詩の特色をなすものに「幽」がある。「幽」は、一〇四回用いられ、幽林、幽谷、幽居、幽草など、奥深い、静かな趣きである。が、韋応物の「幽」の境地は、暗くわびしいものではない。「清幽」と合わせ用いた例もあるように、常に、明るさ、清らかさをたたえている。「清」は、「清」としての独自の特色を持ちながら、「幽」の中にも流れこんでいるのである。

「清」「幽」に加え、明るさも韋応物の世界に添うものであった。おだやかな明るさであり、澄んだ明るさである。そして又、「明」という語を用いないところにもかもし出される明るさも特色であろう。

更に、中国的自然観から導き出される「独」と「孤」の境地、淡泊な詩境へのあこがれ、幽居を楽しみ、世から超然として、自然を愛す韋応物の生活態度も、彼の詩の特色の一端をなすであろう。

「幽」は、「清」や「明」の境地を含み、「清」も又、「明」や「淡」と共通するものを持っている。

以上は、内容面からの特色であるが、形式面より見れば、五五三首中、五言詩は四六九首を占め圧倒的に多い。五言の中では、八句形式が最も多く、十二句、十六句形式がそれに続いている。峻然との逸話からも、五言詩を得意としていたことが知られるが、これによっても、韋応物は、古言古体詩を得意としていたことが知られるのである。

どの項目をとっても、初歩的段階のものであり、これから先、発展すべき問題を数多く残しているが、一応のまとめはつけてみたつもりである。

「野草」は一九二四年の秋から一九二六年の春まで、約一年八ヶ月の間、「野草」という総題のもとに、断続して書かれた二三篇からなる散文詩集である。それは魯迅の二四集にものぼる作品集の中の創作集である「呐喊」や「彷徨」に続くものであり、時期的には「彷徨」の時期と重複し、あとの方は回想的作品「朝花夕拾」とも重なっている。

私がここで試みようとしたのは、一口でいうならば、この散文詩の作品世界の分析ということであり、「野草」という作品論をやることによって、「民族魂」といわれた魯迅の人間像に接近することであった。

そのために、「野草」をうみだした作者の発想や表現、さらにはその周辺の問題を考察し、そこから一つは文学者魯迅の本質を知りもう一つは五四運動以後の沈滞した革命の風潮の中での人間魯迅の苦悩の跡をさぐり、そこから彼の思想が、この「野草」をうみ出すことによって、いかに変ったかを考察し、魯迅は不変であったという竹内説と「進化論」から「マルクス主義」へという主に新中国における公式的見解への自分なりの検討を行ないたいと考えた。

私は「野草」という作品を分析する上で、主に「夢」という語を手がかりとした。というのは、「野草」の世界が幻想的夢想的詩の世界であり、作者の閉された内側の想像的所産によって根本的には成り立っていると仮定したからである。作者自身「誇大点説、就

是散文詩」(自選集自序)といい、多くの人によっても、また、この作品が詩であると是認されているのも、以上の理由によるからだと考えたからである。

「夢」なる語は、「野草」二三篇中九篇にみられ、「夢」という語そのものはないにしても、睡眠中の出来事として成り立っている「影的告别」や「好的故事」を数えと、一篇になる。また、他の集からそれを見るならば、すでに一九一八年、魯迅が「狂人日記」を「新青年」誌上に発表したその号に、口語詩第一作として「夢」という題の作品が掲載されており、「呐喊自序」(一九二〇)の冒頭にも「我在年青時候也曾經過許多夢」と語られている。

これらの「夢」の例が一概に同一用法だとするわけにはいかなかったが、そこから、魯迅の文学をうみ出す発想の一つの形体がうかがわれるのではないか、というのが私の結論の一つである。

もう一つは、この「夢」なる語の内容の推移によって、魯迅自身の思想上の変化の過程を知ることができるのではないか、ということ。つまり、口語詩「夢」における「爾來爾來！明白的夢」という多少ヒステリックな呐喊のさけびが、その後もずっと続けてさけびれており、一九二五年頃の魯迅の精神をある面で象徴する「彷徨」という言葉の中にもみられるし、「路漫漫其修遠兮、吾將上下而求索」に集約されるその当時の彼自身の内部における一つの実験が、この難解な散文詩として形象化されたのであらうとおもう。そして「野草」第一作の「秋夜」の中の「小粉紅花的夢」と最後の作「一覺」の「很長的夢」との対象に対する作者の感情の相違から、この時期の彼の内部における実験が、なんらかの形で完了をみたものではなからうかと考えるのである。

そして、この完了を促したものは、一九二五年における魯迅の周囲をとりまいていた外的条件であり、具体的にさすならば「新青年必讀書」の問題、女師大事件とそれに関する陳西滢ら現代評論派に対する「打落水狗」ともいべき透徹した論争の態度であったといえよう。

要するに「野草」は、「彷徨」という言葉に象徴される、一時期における魯迅自身の座標点を見定めるために書かれたものであり、そこから、それ以後彼があまり創作らしいものを発表せず、「雜感文」形式のより直接的表現性にとむ批評の方向へ進んでいった、一つの説明がえられるのではないか、というのが結論といえようであらう。

(一九六二、一二、二三夜)

## 孟 郊 研 究

武 田 昭 一

孟郊の詩で、最も人口に膾炙しているものといえば、恐らく「遊子吟」や「古離別」であらう。そしてまた、これだけという感じもする。私も初めて孟郊に接した作品が、この二首であり、彼の第一印象は、これらのようなおだやかなムードだった。ところが、これは、多分に伝統的な彼の評価から来る偏見であって、決してこれが彼本来の姿でないことは、最近の新中国の孟郊の評価によって知った。

孟郊は韓愈等のグループに属し、大野実之助氏は「古学派」と称

したが、伝統的な儒教の倫理思想をふりかざした一派の中心的存在の一人である。従つて彼の詩作のエネルギーもそれに依つてゐる。つまり、古代の理想的儒教精神に法つて、政治に参加し、理想的社会の実現に寄与したいという非常に強い望みがすべての出発点となつてゐる。彼の詩の最大のテーマは「人事」——すなわち、政治、社会、人心、とかいったものであり、何等かの意味でこのテーマと意識的な直結のない作品は極めて少ない事からも、その関心の強さが知られる。その関心は非常にゆとりのない性急な追求心となつてあらわれる。孟郊の性格として先ず感じられるのは、極めて一途で純粹な性格であるが、それはいろいろな意味で彼の詩を方向づける働きをしてゐる。題材への執着、同一表現法への執着、或は連想の展開の遅さ、想像力の乏しき、などが物語るように、孟郊の詩の顯著な性格として、凝集性が強いということ、或は拡張的能力に乏しいということ、更に言いかえれば、内側に向うエネルギーを持つということが言えるようである。あまりにも意識のあらわな、直接的表現が多いことから、常に終極的な対象へ向つて何物をもつきつめざるを得ない性急な追求心が強く存在したものと見られる。彼の詩句のあらゆる面でみられる理智的な操作は、必然的にこのような性格から生み出されるものであらう。一種の「観念の世界」にまで入りこんでしまつてゐるということが云える。杜甫と孟郊とは数々の面で共通点を持つ。つまり、政治、社会に対する大きな関心、ドン・キホーテ的な理想主義者であるが、一向に政治家でない点、不正なものに対してあくまでも叫びつづけるキマジメな誠実さ、不幸なものへの関心、等々であるが、それにもかかわらず、両者を決定的にひき離すものは、この「観念の世界」ということであらう。たとえ

ば杜甫は「生活」に見る所があつた。自らの生活をしみじみと味わう態度があり、更には、生活を営む一切のものに対する愛情へと拡がりを見せて行つてゐる。そこには博愛主義的精神の芽生える基盤があつた。孟郊は「生活」をみてゐない。身近な生活の中の諸対象を、理智以前のまゝに眺めるよりは、より大きな、政治、社会といったものを眺めざるを得なかつた。彼の「古の精神」はまだ極めて抽象的な段階であり、「生活」の中に消化されるには程遠いものだったらうと思われる。つまり、終極的な対象——より根本的なもの、より原理的なものへと接近せざるを得ないということ、やはり高遠な「観念の世界」からは脱けられないものであつた。人間に対する興味の持ち方にしても、杜甫がより人間感情を重んじる風であるなら、孟郊はより徳性を重んじるという風である。新中國で最近高く評価されている「人民詩」についてみて、杜甫が、生活者として、より人民に近い位置に立つ事が可能であつたのに比し、孟郊にはより高い位置、傍観者的位置から眺めた態度が濃厚である。人民への真の同情も、より根本的なものへの志向のかけに隠れてしまふという性格は、孟郊にとつて如何ともし難いものであつた。

孟郊の詩は古来、「寒澁」「寒澁」「寒」などの評語を以て排斥される傾向にあつた。これ等の意味する所は、等しく、「豊かさ」「のびやかさの不足」といったものであるが、これらはみな彼の一途な性格、性急な追求心、甚だしい理智性などのもたらす結果であると思はれる。孟郊の詩人としての限界の一面はたしかにここに示されてゐるであらう。しかし、一見、反価値的方向を持つこれ等の性格が、かえつて孟郊の詩の評価を支えている向きもある。「生活」や「感情」は没却されてしまつてゐるが、直進的な純粹な精神が、

より表面にあらわれているという事があり、また、非常に高い凝縮性を持つが故に、その作品はエネルギーの結集された、相当地に燃焼度の高いものとなっている事も、否定出来ない事実だからである。

## 詩経国風の中の文学形態の諸要素に関する考察

片桐 晴夫

私は詩経国風の中で原始時代の文学が如何に發生し、それが如何に展開して来たのかということを知りたいと思つて右の題目のもとに国風を考察した。考察の順序としてまず国風の外形上の著しい特色について考えてみた。

### 1、形容辭に関する考察。

(i) 二字で表わされる形容辭が圧倒的に多いということ。これらは全て擬聲語、擬態語とみてよいと思う。

(ii) 一字で表わされる形容辭は助辭と合して二字となっている場合が多いということ。

(i) 直喩的表現「如」がみられるということ。

### 2、句末の助辭に関する考察。

### 3、折り返し句（リフレイン）に関する考察。

### 4、各詩篇の歌い出しとそれに続く句の關係の考察。

### 5、対句、対偶に関する考察。

### 6、国風の中の特殊な語句、又は頻出する語句に関する考察。

君子、叔、伯、孟姜、子、人、士、女、心之憂矣、等。

以上の考察によつて国風は民謡の性質を持つているということがわかった。が、国風全てを単に民謡といつて片づけることは出来ない。この中にはきわめて単純素朴なものから個人の創作と考えられるものまできわめて広範闊な詩が含まれている。次に以上の考察を参考にして国風の中に民謡舞踊 (Ballad Dance) の最も原初的形態の見られるもの、叙事的要素の優勢なもの、抒情的要素の優勢なもの、劇的要素の優勢なものなどのように含まれているかということに考察した。まず国風の諸詩篇を内容上から次のように分類して、各々について考えてみた。

### 1、草摘歌。採薪歌。

### 2、結婚歌。

### 3、君主其の他の人を讃える歌。

### 4、狩りの歌。

### 5、征役に関する歌。

### 6、恋愛の歌。

### 7、妻の悲しみを歌うもの。

### 8、人をそしめる歌。

### 9、その他。

### 10、不明なもの。

一番問題となるのは民謡舞踊の最も原初的な詩と劇的要素の優勢な詩との區別を何によつてつけるかということであった。このことについては自分の態度は甚だあいまいであった。だが劇的要素が優勢であると思われる詩篇は全て民謡舞踊の原初的な姿を有しているということが出来るのではないかと考えた。これらの詩は草摘歌、採薪歌、結婚歌、君主其の他の人を讃える歌、恋愛歌の中に多く含

まれているということがわかった。ここに見られるのは大変面白い遊戯的な気分である。

抒情的要素の優勢な詩篇は特に征役に関する歌、妻の悲しみを歌うもの、人をそしめる歌に多く属している。これらの詩篇には陰うつな雰囲気を感じられ、この中にはかなり技巧的手法の見られるものがある。例えば「閑睡」「撃鼓」「東山」「葛生」等である。

叙事的要素の優勢な詩は数少なく、自分は「駟驥」「谷風」「恨」「定之方中」「七月」等がこれに相当すると考えた。

又各々の要素の優勢な詩篇と詩の形（句の数、章の数、疊詠体か否か等）との間には密接な関係があるように思われたが、自分はその関係を明らかにすることは出来なかった。が、次のことだけは、はっきりとわかった。

劇的要素の優勢な詩は一般に句数、章数は少ないということ。

抒情的要素の優勢な詩については疊詠体又はそれに近い形をとっているものが多いということ。

叙事的要素の優勢な詩については各章を記号で表わせはABC…；式の非疊詠体をとっているし、又長篇であるということ。これは歌われたというよりも朗吟された、語られたものであるということを示しているのではないかと自分は考えた。

## 中国児童文学小史

広田小夜子

中国の児童文学について、かねてから興味は持っていたが、いざ

卒論のテーマとして目の前に置いてみると、殆んど無から出発するのと同じであった。にも拘らず、この方面のまとまった著書も見当たらないので、まず全体の状況を知る事が第一と思い、歴史の形にまとめてみた。

全体は六つの章から成り立っている。序章に於ては、論文を書くに当っての自分の立場を明確にする為に、中国の場合に限らない児童文学一般論の形で、児童文学の定義や内容、問題点等について述べた後、中国の場合の特殊性とそれに附随した問題点（扱う上での事）についてつけ加えた。次の第一章では、全時代を通観し中国児童文学史の大まかな流れを把握して時代区分を行なった。そして第二章以下第五章までが各時代についての細論である。その時代区分は、「民国成立以前」（第二章）、「民国成立から抗日戦争前まで」（第三章）、「抗日戦と内戦の時代」（第四章）、「新中国成立以後」（第五章）の四つであるが、中国児童文学の歴史は、大きく、戦前と戦後の二つに分けられると私は考えた。両者の間には非常に大きな断層がある。そして、その二つの時代に挟まって戦乱期があり、そこには戦前的なものと戦後のものの双方が混入され、独自のものも加わって一つの時代性格を形作っているとみて一章を設けたのであるが、実際には、作品数が少な過ぎてその性格ははっきりとは出て来なかった。

時代を追って簡単に内容を述べてみると、まず第二章（「民国成立以前」）では、中国には近代児童文学以前の前近代児童文学とも言うべきもの（日本では「御伽草子」や「仮名草子」等）が存在しないということを述べ、それらの代用として「旧文学中にみられる児童文学性」を問題にしてみた〔論文中では「三国志演義」「水

「済伝」「西游记」「聊齋志異」を取り上げた。以下同様に「内は扱った作品名である」。そして第三章（「民国成立から抗日戦前まで」）では、その様な中国に於て、児童文学誕生のきっかけとなる所の「児童尊重」の考えを最初に持った人として魯迅と周作人の存在にふれた。特に周作人の児童文学理論の方面での活躍（「児童文学小論」「児童劇」序論、E・T・C）は注目に値すると思う。実際の創作では、葉紹鈞に中国最初の童話集「稻草人」（一九三三年）があり、その後の彼の活躍（童話集「古代英雄的像」E・T・C）からみても、草分け中の草分けとしてまず挙げるべきであろう。他に、一九二〇年代では謝冰心（「斯人独憔悴」「寄小讀者」「寂寞」「別後」「分」「冬兒姑娘」と、魯迅（「故郷」「社戯」「鴨的喜劇」）があり、一九三〇年代には張天翼（「大林和小林」「一件尋常事」「奇怪的地方」「奇偶」E・T・C）、老舍（「小坡的生日」）、刘大杰（「三兒苦学記」のち「童年」と改名）、巴金童話集「長生塔」、丁玲（「一顆未出膛的槍彈」「松子」とやゝ多彩になる。が、才人張天翼の登場によって漸く本格化しようとした中国の児童文学は、一九三七年、抗日戦争の勃発を境に、活動停止に近い状態となってしまう。それが児童文学の谷間とも言うべき戦乱期であり、注目すべき事柄としては、戦争児童文学の初登場がある。この第四章（「抗日戦と内戦の時代」）は、扱った作品数も少く「『再寄小讀者』（謝冰心）」「蝦球伝」（黄谷柳）」「西流水的孩子們」（周而复）」「小英雄雨来」（管桦）」「新兒女英雄伝」（孔厥・袁静）、又、実態も資料不足の為掴み切れず、残された問題の多い個所となつてしまつた。そして次の第五章（「新中国成立以後」）に於て、中国の児童文学は大きな飛躍をみるわけで、私自身もこの章の比重

をより重く見、スペースも最も多くさいている（さかざるを得なかった）。まず第一に、児童文学作品の生産者（児童文学作家と呼び得るかどうかはわからないが）の数がふえ、その性格も変つた。例えば、戦前の児童文学の担い手が、みな当時の第一線で活躍していた作家達であつたのに反し、戦後の作品には、無名の新人の手によつてゐるものが多い。作品数も勿論激増した。それは作品名を列記するだけでも、これだけの紙面では不可能と思われる数である。従つてここでは作品・作家名は省略するが、私はそれらの作品を、競争リアリズム童話、身辺リアリズム童話、幼・低年向きメルヘン童話……その他の系列に分けて考へてみたのである。作品そのものの完成度からみれば、戦前に比べて飛躍的とは言えず、むしろ劣つてゐる面も多いが、児童文学創作組が組織され、一九五五年からは年一回「児童文学選」が出されるなど、意気込みの点で全く戦前とは違つてゐる。現在でも方面によつては（少年小説など）日本を追い越してゐると言えるが、もし両国が今のまま行けば、中国の児童文学はいつか日本を全面的に追い越すであろう。と、これは結語としてつけ加えた私の私見である。

## 北京語の句末における 助詞の機能と用法について

牧野 彰 夫

外国語を学ぶ場合に、多くの困難な問題に出会う。それは、われわれが日常用いてゐる言葉とは発生から現在に至る過程に大きな相

違が見られるためである。どの言葉も、相手に意志を伝達することを目的としていることから、それぞれニュアンスを持っている。中国語もその例にもれる事なく、文章なり会話なりの持っている大意を知ることができても、書かれ話されている言葉の趣は非常につかみにくい。特に文法上助詞の範疇に入れられている言葉は文末に主について、語の気持ちを添える機能を持っている。助詞自体を抽出しても具体的な意味は持たない。このような点から、助詞の果たす役割についての研究を進めてみたいと考えた。

#### ▲従来の研究から見た問題点▼

先ず、助詞が従来文法上どのように位置づけられているかについて比較検討してみる。研究家の各々によって呼称も定義の下し方も異なっており、機能別の分類も多様であった。特にその中で問題となる点をまとめると次のようである。

(一) 口扁のつけられた助詞(嗎・呢など) についての見解はほとんど一致していたこと。

(二) 「了」と「的」を助詞に加える場合の分類の仕方は、いくつかの異なった意見が見られた。「了」は詞尾としての用法と、純粹に助詞としての用法との二通りに分けられている。また「的」は他の助詞と区別して扱っている例が多く見られた。

このような点から、用法の上でも特に「了」と「的」とは、他の一般的な助詞とは何か相違があるのではないかと考え、実際の用例を調べる中心問題とした。

#### ▲用例の上から見た問題点▼

さきに記した事柄を主眼点として、実際の用例を調べた。資料としては老舍作の劇本『竜鬚溝』を用いた。その会話の部分から助詞

の使われている箇所を抜き出して、同一の助詞別に類似の用法を整理した。助詞は一般の文章よりも会話に多くあらわれる事から劇の脚本を用いた。結果を要約すれば次のとおりである。

(一) 「了」は文中、文末を問わず、動詞につけられているもの也非常に多い。会話では「動詞＋「了」＋簡単な賓語」の形が多多く見られた。また「了了」という形は会話には少ししか見られない。

(二) 「啊」が文末に添えられるとき、単に前に来る言葉の末尾の音による影響だけで「呀」「哇」等に変わるのではなく、その他の要素が考えられる。「呀」のつけられる文には疑問をあらわすものが多い事などが理由として挙げられる。

(三) (二)と同様の事実は「呢」と「哪」との関係についても言える。「呢」は疑問の気持を持つ会話の末尾に多く添えられ「哪」は感嘆の要素を加えるときに多く用いられる。

(四) 「的」は「是」と呼応して用いる例が、文末につくもののうち約半数を占めている。

(五) 用法の少ない助詞(咧、哟、噯など)は口扁をつけてあらわしている。

#### まとめ

従来の文法研究と実際の用例とを比較してみると、いくつかの疑問点が見られる。それを総合的にまとめて、助詞の性質について明らかにしたいと考える。

本来の助詞は、文や言葉の末尾に何らかの音をつけることによって微妙な気持をそこに添えるものである。書かれる場合には、単な



る音を表わす目的でそれと類似の発音を持つ字に口扁をつけた字を用いる。このような点で、「了」と「的」は「嗎」や「呢」などの助詞とは異なったものであると言える。「了」と「的」は文の末尾以外にも用いられる場合が非常に多い。しかし「了」と「的」が類似の用法を持つ助詞であるとは言い得ない。用法の上でこの二つも種々の相違点が見られる。

さらに、語氣（言葉のニュアンス）と助詞の機能について考えてみると、会話自体もその調子によって、いろいろな気持を表わすことができる。助詞の果たす役割はあくまでも語氣伝達をする補助的なものであって、すべてが助詞によつてのみ伝えられるものではない。

助詞の用法の詳細な部分については研究を進めることができず、疑問提出の程度に終つてしまつたが、中国語についての関心を深めることができた点で意義があつたと考えている。

## 孟子の研究

——孟子の庶民觀を中心に——

亀原 壯夫

右のような題目を、王者の民、覇者の民、先王の民、仁政と民、聖賢と民、天と民、禪讓放伐と民、階級制度と民、生産と民、教育と民、戦争と民、等の項目に分類して考えてみました。その中の一つ、「戦争と民」の中から一部抜粋してみましよう。

○今之事君者皆曰、（中略）我能爲君約與國、戰必克、今之所謂良

臣、古之所謂民賊也、君不郷道、不志於仁、而求爲之強戰、是輔桀也、（告子）

○有人曰、我善爲陳、我善爲戰、大罪也、（盡心）

○況於爲之強戰、爭地以戰、殺人盈野、爭城以戰、殺人盈城、此所謂率土地而食人肉、罪不容於死、故善戰者服上刑、連諸侯者次之、（離婁）

孟子は、戦争が上手だという者は、最上の重刑に服すべきだとし、諸侯を連命せしめて互に攻伐せしむる者（蘇秦・張儀の類）は、その次の刑に服すべきだとした。君主の爲に侵略的な無理な戦争を起こし、土地が欲しい爲に戦争をして、人を殺しめるに至つては、不仁暴虐の甚しいもので、その罪の大なること、死刑でも償いきれないと、侵略的な軍国主義を排斥した。

孟子は、『春秋無義戰、彼善於此則有之矣。征者上伐下也、敵國不相征也、（盡心）』と言っているように、春秋經には戦を記すことは多いが、義に合った戦は一つもないとし、道徳を論ずれば必ず堯舜を称したように、征伐を論ずれば必ず湯武を称した。蓋しそれは民を治むるには堯舜に法らなければ暴を爲し、軍隊を用いるのに湯武に法らなければ、乱を爲すと考えたからであらう。

○書曰、湯一征自葛始、天下信之、東面而征、西夷怨、南面而征、北狄怨、曰奚爲後我、民望之、若大旱之望雲霓也、歸市不止、耕者不變、誅其君而弔、若時雨降、民大悅、書曰、徯我后、后來其蘇、（梁惠王）

○取之而燕民悅、則取之、古之人有行之者、武王是也、取之而燕民不悅、則勿取、古之人有行之者、文王是也、以萬重之國伐

萬重之國、簞食壺漿、以迎王師、豈有他哉、避水火也、如水益深、如火益熱、亦運而已矣、(梁惠王)

孟子は、征伐の道は、民心に順って民心が悦ばなければならぬとした。そして征伐は暴虐な君主を誅して百姓を寧んずるためであった。しかしこのような征伐の資格を有する者は「天吏」、即ち天意を受けた者でなければならない。

しかし孟子は、民の逃げるのを防ぐに困境の限界を以てせず、國を堅固にするのに山谷の險阻を以てしないように、また天下を威嚇するのには兵革の銳利を以てしないことを主張した。これは、晏子が齊の景公に説いた、『師行而糧食、飢者弗食、勞者弗息、睨睨胥讒、民乃作慝、方命虐民』(梁惠王)のごとき人民の慘目傷心の有様を孟子自身目撃し、また孟子の時代は、『如有不嗜殺人者、則天下之民、皆引領而望之矣、誠如是也、民歸之、由水之就下沛然、誰能禦之』のごとき状態であったから、人民の支持を得た戦が必ず勝つと信じた。このことは、孟子が天時・地利・人和の三者の中、人和を以て第一と爲し、『得道者多助、失道者寡助、寡助之至、親戚畔之、多助之至、天下順之、以天下之所順、攻親戚之所畔、故君子有不戰、戰必勝矣』(公孫丑)の言からも明らかであろうし、戦争は止むを得ざるに至って始めて爲すべしという、平和主義者であったことも窺い得る。

彼は人民の支持を得た戦が必ず勝つと信じていたから、もし民意に反き民意を無視した戦に至っては、断じて彼の指弾を免れることができなかった。魯の好戦將軍慎子を戒めて、『不教民而用之、謂之殃民、殃民者、不容於堯舜之世』と言ひ、梁の惠王の不仁を弾劾したのは、その理由が『以土地之故、糜爛其民而戰之』たるにある。

## 「搜神記」研究

大野 富雄

### 序章 「序論」

#### 第一節 研究目的及び方針

①「搜神記」を通して民衆の心意を探る。

②物語文学の始源的性格をもっているようだが、それを究めた。

③志怪の代表的作品として。

④六朝前後の風俗・風習を窺う。

※要するに、基本的な研究方針、研究態度としては、説話文学としての「搜神記」という線で眺めていく。

#### 第二節 作品及び作者について

(一) 作者について

(i) 作者略伝『晋の干宝

(ii) 編纂意図』「及其(謂「搜神記」)著述、亦足以發明神道之不誣也。」とある。(序文に)

(二) 作品について

(i) 資料的考察

○成立年代『四世紀

○二十卷本と八卷本『二十卷本の方が原典の面影をよく伝えている。(本研究に於ても二十卷本をテキストとして

用いる。)

(ii) 時代背景『厭世的、末法的な風潮が広まっていた六朝の

時代精神の産物。

## 〔本論〕

### 第一章 作品分析

#### 第一節 「搜神記」の構成

##### (一) 巻数 全二十巻

##### (二) 話の数 四百六十四話

(三) 巻別と話の内容 似通っている話別に巻をまとめようとした形跡が窺える。

四話の分類 三十一のモチーフに分ける。(但し、単一のモチーフから成る話は稀で、多くはいくつかのモチーフが集まって、一つの話を形成している)

- ①動物譚、②人物伝説、③地名伝説、④神仙道術譚、⑤雨乞い譚、⑥神と人との交渉譚、⑦異郷譚、⑧予言譚、⑨予感・予知譚、⑩占卜譚、⑪恋愛・結婚譚、⑫復讐譚、⑬妖怪・化物譚、⑭夢譚、⑮風俗風習譚、⑯孝行譚、⑰德行・貞節譚、⑱報恩譚、⑲博学強覧譚、⑳祠廟の因縁譚、㉑神仏の靈験譚、㉒謎解き譚、㉓幽霊譚、㉔蘇生譚、㉕言葉の由来譚、㉖易伝譚、㉗奇型譚、㉘奇蹟譚、㉙変身・変性譚、㉚異類産生譚、㉛その他

### 第二章 文学的考察

#### 第一節 「搜神記」の本質

##### (一) 説話文学としての「搜神記」

○説話文学の五つの性格

- ①伝承的である
- ②叙事的である

③民衆的である

④伝奇的である

※「搜神記」は①④の性格は十分備えているが、最後の教訓性にはやや欠けている。

(二) 志怪としての「搜神記」 話の数、種類も豊富で、志怪の代表的作品といえる。

#### 第二節 中国文学史における「搜神記」の占める位置

(一) 物語文学の始祖的存在として

### 第三章 民俗学的考察

#### 第一節 「搜神記」に見られる民衆の考え方、願望、信仰及び風俗風習

(一) 恋愛・結婚観

● 恋愛を讃美、推奨している。

(二) 蘇生者に対する見方

● どちらかというと歓迎すべきもの、縁起のよいものと見ている。

(三) 幽霊(鬼)観

● 幽霊をして、風流で、お人よしで、間の抜けた憎めないものと見る傾向が強い。又、このような見方の反映か、赤や青の派手な衣服を着けた幽霊(足もある)が多いのは興味深い。

四動物観

①蛇に対する見方・性格づけ 妖怪的なもの、歓迎すべからざるものと見ている。

②犬に対する見方・性格づけ 愛玩動物、番犬、忠誠な動物と見ている。

③馬に対する見方・性格づけ＝性格は、はっきりしない。

④虎に対する見方・性格づけ＝神聖な動物、忠誠な動物と見られている。

⑤狐に対する見方・性格づけ＝妖怪変化を働く動物と見てゐる。

※右の他、豚、羊、猿等、合計六十五種、延べ百四十七話（全体の31.7%）に動物が登場するが、動物観全体の特徴としては、豚、羊、鹿等の身近な、おとなしい筈の動物までも、妖怪変化と見る傾向が強いことである。

〔結論〕

結 章 　　む 　　す 　　び

## 「蕉堅稿」について

嵯 峨 喜 久

蕉堅稿は、五山の詩僧絶海の詩文集である。卒業論文をかくにあたっては、範圍を詩に限った。おもにやったことは、絶海の詩の特徴、これまでどのように評価されてきたか、又絶海の生涯にわたって、大きな影響をあたえた友人でもあり、宗門上の兄弟子でもある義堂周信との関係、入明してから師事し、詩文の方面で学ぶところの大きかった季渾宗渤をはじめとして、清遠懷潤、用貞輔良などの人々との関係等であり、律詩、絶句、古詩、長律よりなる詩の理解鑑賞をめざし、入明中の作に重点をおき、絶海の詩の批評といった形になった。

## 老子麁齋口義と

## その日本に於ける流行の特質

永 窪 啓 治

我々日本人は独自の思想体系と云うべきものを作りだしたことがない。このことは日本人が頼りたすべき思想的防波堤を持たず、外来思想に対して常に受身であり、極めて弱い立場に立たされる根本的な原因ではないのか。そして又その集積された状態が近來の思想的混乱ではないのだろうか。とまあこんな生意氣な考えから、私は歴史上極めて特異な思想的伝播の形を持つと思われる江戸時代の老子麁齋口義盛行の跡を追うことにしたのである。

一体日本に於ては律令制の時代から老子書の占める位置はさほど高いものではなかったようだ。例えば大学寮での履修教科に老子が含まれていないことがある。唐代の学制でもそうになっているのなら驚くこともあるまい。だが唐代は特殊事情があるとはいえ、老子書は重視され、大学の履修科目とすることは勿論、科擧の試験にも採用され「老子に通ぜざる者は朝に仕ふるを得ず」とまで言われた時代である。しかも老子書が斥けられたことを除けば唐の学制は殆んどそのまま日本の学制になってしまふのだ。中国文物の摂取に大童だった当時としては、これは珍らしく自主的な撰択ではなかったろうか。又経国集巻廿には老子排斥を強くうちだした葛井広成と下毛虫麻呂の対策文が見える。このように老子が好まれなかった原因は種々あろうけれど、一番大きなものは老子の主張がニヒリズ

ムであり、社会破壊論であると考えられたことのようにだ。清談とか独善主義が口をきわめて非難されていることからそうと察せられる。新興国にこういう思想が歓迎されないのは当然であろうし、賢明な措置だったのかもしれない。尤もこれで老子は読まれなかったとするのは早計に過ぎるだろう。平安朝初期の日本国見在書目には王註、河上公註以下二十六種の老子解釈書の名があるから、これらが読まれなかったとは思えない。ただ快く思われていなかったということだ。

室町時代は朱子学が輸入され、儒学方面でも新風を興す素地が作られるのだが、老子虚齋口義もこの時代に流入したものらしく思われる。これは南宋終末期の儒者林希逸の著作で、莊子口義、列子口義と共に三子口義と称され、林羅山によって訓点をつけられ翻刻されるに及んで、それ迄用いられていた河上公註に代り、老子註としては破格の待遇をうけることになる。

林希逸が「以尹洛之学倡東南者自光朝始」と云われた儒者林光朝の後学であることは口義の内容を儒学的なものにせずにはおかず、希逸は儒老同源という立場から老子を見る。

「若老子所謂無為而自化、不爭而善勝、皆不畔於吾書。其所異者特矯世憤俗之辭、時有大過耳」（老子虚齋口義発題）

宋代にもう一つの老子解として蘇轍の老子義があり、これは仏教と老子の類似を重視するのだが、希逸はこれに反対する立場を発題中に表明している。ただ口義には仏説の混入が幾分か見られ、完全に仏老分離が守られたとは言えない。それにしても大体の傾向としては仏老不同という方向に向いていると考えたい。口義の内容で他に目につくのは、老子と莊子を分離したことであり、老子は所謂

「虚無」を主張する者ではないと考えることである。江戸時代に老子虚齋口義が前代に比べて圧倒的に多くの読者を獲得したという事実はこのような口義の特色、即ち(1)老儒同源、(2)仏老不同、(3)老莊分離、(4)老子は虚無を主張せず、ということをもふまえたものでなくてはなるまい。勿論その他に内容が平易であるとか、儒学における新註の流行に刺激されたということもあるだろう。だがそれにしては虚齋口義の流行は異常な程である。これは矢張儒学との関係なしには考えられない。それにこの盛行の魁をなしたのが林羅山であったことも私としては見逃すことはできないのである。林羅山は儒学者であると共に江戸幕府の儒官である。儒学は官学として採用されていた当時としては、老子と儒学を接近させた老子口義は至極好都合なものだったろうと考えるのは小人のうがちに過ぎないであろうか。浅学を顧みずもつとはつきり言うなら、彼の政治的意見、つまりは江戸幕府の政治的意見を徹底させるために、羅山は老子書を、え利用したと思われる節があるのである。紙数の関係で例文を引くことはできないが、彼の著作の一つ、老子経抄の中の兵事に関するもの、政事の理想を述べるものは、その一例であるように思えてならない。

古代日本では斥けられた老子は虚齋口義の出現によってその様子を一变し江戸時代に未曾有の盛行をみた。これは外面的には不思議とも思える現象であり、封建体制下の学問の姿を髣髴させ、我々に大きな興味と示唆を与えずにはおかぬ。

# 南唐後主李煜

高崎英之

## △目標▽

作品（詞・詩・文）時代背景及び環境等の、あらゆる面から李煜と云う人間を浮き彫りにする、と云うのがこの論文の目標である。今までの彼に関する研究は、大体に於て詞のみに限られていた観があるが、彼は詞以外の詩・文にも大いにその才能を発揮しており、これ等を総合して見た時に初めて、彼の本当の姿が出て来ると思ふのである。

## △過程▽

詞について考えて見た時、大まかに云つて三つの時期に分ける事が出来、しかも内容面からもこの分類は妥当なのである。従つて、この論文に於てはこの詞の分類にそつて、時期的・内容的両面から詩・文をふり分け、総合的に追求して見た。勿論、その各々の分類の時代背景及び李煜の生活環境と云つたものを考慮に入れての上である。では具体的にこの分類の作品を見ていつてみよう。

## △一類—宮廷生活・男女間の歡樂生活

### 例、一斛珠（詞）

曉粧初過。沈檀輕注些兒箇。

向人微露丁香顆。一曲清歌、暫引櫻桃。

羅袖裊殘殷色可。杯深旋被香醪澆。

繡床斜倚嬌無那。爛嚼紅茸。笑向檀郎唾。

○、詩・文なし。

## △二類—別恨離愁、感時傷春

(イ) 些末な哀愁・相思・傷春

### 例、採桑子（詞）

亭前春逐紅英尽。舞態徘徊。

細雨霏々。不放雙眉時暫開。

綠窗冷靜芳音斷。香印成灰。

可奈情懷。欲睡朦朧入夢來。

(ロ) 真実の感情を持った離愁別恨

### 例、烏夜啼（詞）

昨夜風兼雨。簾幰颯々秋声。

燭殘漏滴頻欹枕。起坐不能平。

世事漫隨流水。算來一夢浮生。

醉鄉路穩宜頻到。此外不堪行。

### 例、感懷（詩）

又見桐花發舊枝。一樓煙雨暮寒淒。

凭闌惆悵人誰會。不覺潛然淚眼低。

層城無復見嬌姿。佳節纏哀不自持。

空有當年旧煙月。芙蓉城上哭蛾眉。

### 例、卻登高文（文）

……左右進而言曰：維芳時令月、可藉野以登高。……余告之曰：

……陟彼岡矣、企予足、望復岡兮、睇予目。原有鶴兮相從飛、嗟予季

兮不來歸。空蒼々兮風淒々、心躑々兮、淚漣漣。無一飲之可作。有

萬緒以纏悲。於戲噫嘻、爾之告、我曾非所宜。

## △三類—追懷往事、悲傷不幸

例、虞美人

春花秋葉何時了。往事知多少。

小樓昨夜又東風。故國不堪回首月明中。

雕闌玉砌依然在。只是朱顏改。

不知都有幾多愁。恰是一江春水向東流。

○、詩・文略。

一類・二類(i)までの作品が李煜の俘となる以前の作品であり、二類(ii)、三類が大体俘以後のものである。俘以前の作品の特徴を見てみると次のようなことが云える。

一、李煜個人を中心として詠じており、風景描写も人間の動きの美追求の背景としてのみ取上げられている。

一、詠じている態度が真摯であり、決していい加減な表現をしていない。

一、一瞬の感情を吐露したものであり、詞を作る為に詞を作った観がある。

一、真実の感情に乏しい。

俘以後の作品の特徴

一、不幸な境遇に於ける煜の哀感・悲愁が、真実の感情をもって詠じられている。

一、頽廢的傾向なし。人生を否定することなく、真の情を素直に詠じている。

一、心理面の動揺が大きく作品に表われており、政治的に無能と云った彼の性格がよく出ている。

一、抽象的な物を具体的に表現すると云う卓越した才能が十分に表われている。

一、一・二類にも見られた「愁」の情が、この期に於て濃く表われ

ている。

一、俘以後の、作者の、人生・運命に対する感慨が強く出ている。人間の運命を直視。

以上で作品に表われた特色と云ったものが大体出せたように思う。では彼がどんな人物であったか、結論に移ろう。

△結論▽

一、兄弟・肉身に対する愛情がこまやか。

一、芸術面の才能大、人間の心の動き、又その動作を把握することに巧み。

一、政治的には無能。

一、外部不安(宋の圧力)に悩まされ続け、それにぶつかって行く勇気の無い、気の弱い平凡な人間、但しあくまで人生を否定することなく、終始まじめに事物を見つめていた。

## 「実践論」研究

中原 尚道

現在の中国が、巨大な思想的変革の渦中にあることは否み難い事実であると考ええる。しかるに、その変革の内容が何であるかと問われるならば、一概に答え得ぬさまざまな問題に気づくのである。勿論その指導原理がいわゆるマルクス主義であることに疑いはない。だが、始め外国からもたらされたそれが、中国の伝統的な基層に、どのように滲透していったのか、またその過程で、果して変質が行なわれなかったか。私は、以上の問題意識から、今日の中国人に強

い思想的影響力を持っていると考えられる毛沢東の「実践論」と、彼がこれを著わすに至る社会史的・思想史的背景を明らかにしようを試みた。

「実践論」は、弁証法的唯物論の認識論のすぐれた概説書であると考ええる。従来のが、しばしば断片的記述にとどまっていたことを思うとき、毛沢東が古典の文献を独創的に解釈しながらこれを体系的に記述したことの意義は大きい。本書の価値は、しかし体系化ということのみに尽きない。毛がこの中で最も力を注いで説くことは、理論と実践の統一という問題である。それを彼は、中国の伝統的な表現に従って、「知行統一」と言う。

「実践論」によれば、人間の認識には、感性的認識、理性的認識、実践の三段階があり、これらは統一的な認識過程の中で循環往復しながら永遠の発展を遂げる、とされる。その過程にあって、社会的実践は、これを通じてのみ豊かな感性的（感覚的）経験が獲得され、かつ弁証法的に理性的認識へ飛躍してゆくための不可欠の条件であり、更にまた、これを通じてのみ理論の真理性が検証され、従って認識の発展が保証されるところの絶対的な根拠である。実践の重要性は、この二重の意味において強調されるのである。「実践論」における独創は、主に以上述べた認識の弁証法的発展の理論的解明に関して行なわれている。そしてこのことは、マルクス主義が中国的な思考のうちで理解され、かつ民族的表现を得たということがらと合わせて、本書の価値を決定する。

このような認識論が持つ欠陥はさておき、次に、何故中国で本書が要求され、いかなる歴史的課題を担って毛沢東がこれを著わした

かについて考えねばならない。これを結論的に言えば、中国民族の思想的方面における近代的な主体性の確立であり、思考に科学的客観性を与えることが目的であった。

中国社会の近代化が、民族解放運動としてあらわれ、西欧にあって近代社会を否定する動力として生まれた共産主義運動が、中国にもたらされて逆に近代社会を形成する動力となったという事情は、思想的方面においても独特の様相をとって現われる。すなわち、中国の共産主義運動が、外国から移入されたマルキシズムをいかに民族化し、中国社会を解放する論理として摂取するかという問題に直面しつつ、同時に、近代的、科学的な思考の主体性の確立を迫られたとき、「実践論」は生み出されたのである。毛の「教条主義批判」「主観主義批判」（共に「実践論」の重要な主題である。）は、外国からとり入れられた思想が、中国というまるで異なった土壌の上に苦悶を続けながら根づいていった過程で必然的に生じた問題に他ならないのである。

（註）教条主義の教条とは、いわゆるドグマであり、具体的にはマルクス主義の機械的、公式的な解釈を批判して用いている。

「実践論」における感性的認識から実践に至る認識の発展段階が、自然科学における観察から実験までのそれに照応していることは言うまでもない。だが、マルクス主義がもたらされる以前の中国に近代科学の伝統が充分成立していなかったという事情は、科学的方法論の確立という任務を、共産主義運動に担わしめたのであった。従って「実践論」には、この他にも近代科学上の諸発見によってもたらされた信念とも言うべきものが随処に見られるのである。その中で最も著しい特徴は、世界が有機的な統一体であり、しかもそれが



# 学会彙報

合法的な過程にあるとする信念である。あらゆる事物に、個々には運動の根本的原理としての「矛盾」を内包し、相互には「相反相成」の關係にあつて、更に高次の運動体を構成する。このような相対的世界観は、直接には近代科学が発見した自然界の法則性によつて確信づけられたものであり、また遠くは中国古代の形而上学的世界との類似性へと我々の想像をいざなうものである。

## 禅思想史研究……………佐々木和夫

## 仁齋学研究……………福島 剛

故松雲堂主人野田文之助翁の世業を継ぐ嗣子義太郎氏には、今般故人の遺志による金一封を本漢文学会に寄附せられました。吾々は、この義心を最も有意義に記念したいと思います。

因に翁は先般業界初めての黄綬褒章を授けられ吾々にも親しみ深い斯界の長老でした。茲に一同深く謝意を表し、併せて故人の冥福を祈りたいと存じます。

○昭和三十六年度漢文学会総会

〔漢文教育研究会〕 六月廿四日(土) 於都立北野高校

### 一、研究授業

三年Bコース

二年Qコース

実施者 長谷川節三氏

市木武雄氏

### 一、研究会第一部

司会 志賀委員

(イ) 開会の辞

志賀委員

(ロ) 当番校挨拶

北野高校長 新井迪之氏

〃

同校国語主任 乙部譲爾氏

〃

実施者阿氏説明

(ハ) 質疑討論

### 一、研究会第二部

司会 鈴木委員

〔新指導要領の問題点〕

(イ) 報告者

上原好一氏

〃

鎌田委員

(ロ) 質疑討論

(ハ) 閉会の辞

内野委員

〔研究発表会〕 六月廿五日(日) 於東京教育大学

司会 鈴木、今井両委員

一、史記正義佚文の来源と真偽

大学院 清水 榮君

一、政權授受の方式よりみたる孟子の政治思想

大学院 高橋 均君